（4） 特別支援学校体育連盟組織の設置状況に関する調査

1. 調査概要

1．1　調査目的

本調査は、地域ブロック及び都道府県の特別支援学校体育連盟組織の設置状況（障害種、種目等）の実態を把握することで、今後の方策検討における基礎情報とすることを目的とする。

1．2　調査対象

全国特別支援学校長会の評議員（47 都道府県代表）を調査の対象とした。

1．3　調査協力

全国特別支援学校長会

1．4　調査方法及び回収結果

【調査 1】　質問紙調査

(1) 調査方法

記名式の質問紙調査
回答は、郵送、電子メールで受け付けた。

(2) 調査内容

地区ブロック及び都道府県の特別支援学校体育連盟組織の名称、対象の障害種別・学部、加盟校数、主催大会の実施種目

(3) 調査期間

2014 年 6 月 23 日～2014 年 7 月 14 日

(4) 回収結果

全国特別支援学校長会の評議員（47 都道府県）　から回答（回収率 100％）

【調査 2】 事例調査（ヒアリング調査）

(1) 調査方法

特別支援学校体育連盟組織の設立経緯、事務局の運営状況及び主催大会などを明らかにするために、5 件の特別支援学校体育連盟組織の担当者に対して聞き取り調査を実施した。

(2) 調査内容

主な調査項目は以下のとおりである。

・組織の設立経緯、加盟校数、対象学部
・事務局組織体制や運営体制
・主催大会や研修会、講習会などの開催状況

(3) 調査期間

2014 年 11 月～2015 年 1 月

2. 調査結果（質問紙調査）

1. 地区ブロック特別支援学校体育連盟組織の設置状況

(1) 障害種別の設置状況

視覚障害と聴覚障害において、地区ブロックごとに特別支援学校体育連盟組織（以下、特体連組織）が設置されていた（図表 4-1）。なお、長野県は、視覚障害では北信越ブロック、聴覚障害では、関東ブロックに所属している。

図表 4-1 地区ブロックの特別支援学校体育連盟組織の設置状況

<table>
<tr><th>地区ブロック</th><th>視覚障害</th><th>聴覚障害</th></tr>
<tr><td>北海道</td><td>北海道盲学校文化体育連盟</td><td>北海道聾学校文化体育連盟</td></tr>
<tr><td>東北</td><td>東北地区盲学校文化・体育連盟</td><td>東北地区聾学校体育連盟</td></tr>
<tr><td>関東</td><td>関東地区盲学校文化・体育連盟</td><td>関東聾学校体育連盟
関東聾学校中学部体育連盟</td></tr>
<tr><td>北信越</td><td>北信越盲学校体育連盟</td><td>北陸地区聾学校体育連盟</td></tr>
<tr><td>東海</td><td>東海地区盲学校体育連盟</td><td>東海地区聾学校体育連盟</td></tr>
<tr><td>近畿</td><td>近畿盲学校体育連盟</td><td>近畿地区聾学校体育連盟</td></tr>
<tr><td>中国</td><td rowspan="2">中国・四国地区盲学校体育連盟</td><td>中国地区ろう学校体育連盟</td></tr>
<tr><td>四国</td><td>四国地区聾学校体育連盟</td></tr>
<tr><td>九州</td><td>九州地区盲学校体育連盟</td><td>九州地区聾学校体育・文化連盟</td></tr>
</table>

注）長野県は、視覚障害では北信越ブロック、聴覚障害では関東ブロックに所属

(2) 主催大会の実施種目

地区ブロックの特体連組織が主催している大会の実施種目を見ると、視覚障害では、「フロアバレーボール」「グランドソフトボール」が上位にあがった(図表 4-2)。2013 年度に文部科学省が実施した「特別支援学校のスポーツ環境に関する調査」では、特別支援学校(視覚障害)における運動部・クラブ活動の実施種目(高等部)の上位種目は、「フロアバレーボール」「グランドソフトボール」「サウンドテーブルテニス」「陸上競技」であった。

図表 4-2 特別支援学校体育連盟組織が主催する大会の実施種目(視覚障害)

(n=8)

種目名(視覚障害)	
フロアバレーボール	7
グランドソフトボール	6
陸上競技	5
卓球	4
サウンドテーブルテニス	3
水泳	3
柔道	2

聴覚障害では、「陸上競技」「卓球」「バレーボール」が上位にあがった(図表 4-3)。文部科学省の 2013 年度調査では、特別支援学校(聴覚障害)における運動部・クラブ活動の実施種目(高等部)の上位種目は、「陸上競技」「卓球」「バレーボール(ソフトバレーボールを含む)」「野球(ティーボール含む)」であった。

図表 4-3 特別支援学校体育連盟組織が主催する大会の実施種目(聴覚障害)

(n=9)

種目名(聴覚障害)	
陸上競技	8
卓球	7
バレーボール	3
野球	2
柔道	1

2. 都道府県特別支援学校体育連盟組織の設置状況

(1) 障害種別の設置状況

都道府県別の特体連組織は、19都県で設置されており、東京都の3つの特体連組織を加えると、全国に 21 の特体連組織があることが分かった(図表 4-4)。障害種別に見ると、全障害種に対応している特体連組織及び知的障害のみが対象の特体連組織がそれぞれ 9 組織あった。聴覚障害、肢体不自由、知的障害・肢体不自由に対応している特体連組織は、それぞれ1組織ずつあった。特体連組織がない府県では、近隣の学校が集まるスポーツの交流会や、校長会主体のスポーツ大会などが開催され、特別支援学校のスポーツ環境を創出している。

図表 4-4 都道府県特別支援学校体育連盟組織の設置状況

No	都道府県	名称	対応種別				
			全障害種	知的障害	聴覚障害	肢体不自由	知的・肢体不自由
1	秋田県	秋田県特別支援学校体育連盟	○				
2	福島県	福島県特別支援学校体育連盟	○				
3	茨城県	茨城県特別支援学校体育連盟	○				
4	栃木県	栃木県特別支援学校知的障害教育校体育連盟		○			
5	群馬県	群馬県特別支援学校体育連盟		○			
6	埼玉県	埼玉県特別支援学校体育連盟	○				
7	千葉県	千葉県特別支援学校体育連盟	○				
8	東京都	東京都特別支援学校・特別支援学級設置学校体育連盟		○			
9		東京都肢体不自由特別支援学校体育連盟				○	
10		東京都ろう学校体育連盟			○		
11	神奈川県	神奈川県特別支援学校体育連盟		○			
12	長野県	長野県養護学校体育連盟		○			
13	新潟県	新潟県特別支援学校体育連盟		○			
14	山梨県	山梨県特別支援体育連盟	○				
15	静岡県	静岡県特別支援学校体育連盟	○				
16	岐阜県	岐阜特別支援学校体育連盟	○				
17	愛知県	愛知県特別支援学校知的障害教育校体育連盟		○			
18	和歌山県	和歌山県支援学校体育連盟					○
19	山口県	山口県特別支援学校体育連盟	○				
20	福岡県	福岡県立特別支援学校知的障害教育校体育連盟		○			
21	沖縄県	沖縄県特別支援学校体育連盟		○			
			9	9	1	1	1

(2) 学部別の設置状況

学部別に見ると、小学部から高等部が対象の特体連組織が 9 組織、中等部・高等部を対象としているのが 8 組織、高等部のみを対象としているのが 4 組織であった（図表 4-5）。

図表 4-5 学部別の設置状況

（n=21）

対象学部	
小学部・中学部・高等部	9
中学部・高等部	8
高等部のみ	4

(3) 加盟校数

加盟校数を見ると、「東京都特別支援学校・特別支援学級設置学校体育連盟」が 80 校で最も多かった。その理由としては、東京都が特別支援学校を最も保有している自治体であること、特別支援学校に加えて、特別支援学級も加盟対象にしていることが挙げられる。特別支援学級を対象にした特体連組織は、東京都のみに存在した。なお、東京都を除いた特体連組織の加盟校数の最大は 39 校、最少は 5 校であった。

(4) 主催大会の実施種目

都道府県の特体連組織が主催する大会の実施種目を見ると、「陸上競技」「サッカー（ブラインドサッカー含む）」「バスケットボール」「フライングディスク」が上位を占めた（図表 4-6）。

図表 4-6 都道府県の特別支援学校体育連盟組織が主催する大会の実施種目

（n=21）

種目名	種目数
陸上競技	16
サッカー（ブラインドサッカー含む）	13
バスケットボール	10
フライングディスク	7
フット（キック）ベースボール	4
野球（ティーボール含む）	4
ソフトボール	3
ボッチャ	3
ロードレース（駅伝含む）	3
バレーボール（ソフトバレー含む）	2
ユニホック	2
ローリングバレーボール	2
ボウリング（レクリエーション的なものを含む）	2

3. 調査結果（事例調査）

全国の特別支援学校体育連盟組織における運営状況、実施事業の内容などを明らかにするために、特徴的な組織に事例ヒアリングを行った（図表 4-7）。

図表 4-7 事例調査で対象とした特別支援学校体育連盟組織

対象障害	組織名	特徴
全障害種	千葉県特別支援学校体育連盟	・3校で開催していた大会が拡大して連盟を設立 ・幅広い生徒が競技に親しめるよう、県独自の種目「Tスロー」を開発 ・卒業後の生徒のスポーツ環境の拠点に特別支援学校を活用
	岐阜県特別支援学校体育連盟	・競技力向上のために改革を行い、組織的な業務体制を整備 ・全校が参加しているフライングディスクの担当教員が中心となり理事会を運営 ・ブロック大会や全国大会に参加する選手やチームを支援費でサポート
知的障害	東京都特別支援学校・ 特別支援学級設置学校体育連盟	・特殊学級の後援団体を母体に、連盟が発足・発展 ・団体競技のバスケットボールとサッカーにも特別支援学級から参加 ・競技ごとにレベル別の参加基準を設けて、加盟校の幅広い参加に配慮
視覚障害	東海地区盲学校体育連盟	・偶数年と奇数年で開催する競技を入れかえて、多くの競技に触れる機会を提供 ・指導者や体育施設の状況により、各校の強化競技は多様
聴覚障害	近畿地区聾学校体育連盟	・陸上競技大会を学部行事にする学校もあり、生徒にスポーツ参加の機会を提供 ・中体連、高体連、高野連に加盟して、健常者の大会にも積極的に出場

千葉県特別支援学校体育連盟

【特徴】
3 校で開催していた大会が拡大して連盟を設立
幅広い生徒が競技に親しめるよう、県独自の種目「T スロー」を開発
卒業後の生徒のスポーツ環境の拠点に特別支援学校を活用

1. プロフィール

(1) 設立経緯

1983 年度に 3 校（市立市川養護学校、県立八千代養護学校、国立千葉大学付属養護学校）がスポーツ大会を開催し、その後、1987 年度に 4 校（市立市川養護学校、県立松戸つくし養護学校、県立柏養護学校、国立千葉大学付属養護学校）が駅伝大会を開催したのが始まりである。毎年開催していくなかで、参加希望の学校が徐々に増え、地域大会での開催規模を超えたことをきっかけに、1991 年、県内のスポーツ大会などを主催する団体として設立した。

(2) 加盟校数

県内 36 校の特別支援学校（分校、分教室は本校と同一校とみなす）のうち、35 校が加盟している。加盟校の内訳は、知的障害が 27 校（単置校 23 校、併置校 4 校）、肢体不自由（単置校）が 3 校、病弱が 3 校（単置校 2 校、併置校 1 校）、視覚障害 1 校、聴覚障害 1 校となっている。

(3) 対象学部

中学部、高等部

(4) 組織運営体制

会長 1 名、副会長 2 名、監事 2 名、事務局長 1 名に加え、専門委員会の中学部委員長 1 名、高等部委員長 1 名、高等部ボッチャ委員長 1 名、駅伝委員長 1 名で構成されている。専門委員会は、大会ごとに設置され、大会前の準備、大会後の反省会及び来年度への引き継ぎを兼ねた委員会を複数回開催する。高等部にボッチャ担当者がいるのは、雨天時に、屋外開催のスポーツ大会と屋内開催のボッチャで対応が異なることから、当日の運営を含めた役割を準備段階から分担するためである。駅伝委員長は、中学部と高等部の二つの駅伝大会を担当する。

(5) 事務局設置校

県立千葉特別支援学校

当初からの中心校であった県立千葉特別支援学校内に事務局を置き、会長は、県立千葉特別支援学校の校長が務める。

2. 主催事業の内容

(1) 大会

スポーツ大会は中学部、高等部で別日開催されるが、実施競技は異なっている(図表 4-8)。中学部で実施する「T スロー」は、県立千葉特別支援学校が発祥の競技である。中学部にボッチャのルールを把握するのが困難な生徒がいたため、円の的に向けて、ボッチャのボールを交互に投げ合い、入ったボール数を競う競技に簡素化した。中学部でTスローを経験した生徒は、高等部でスムーズにボッチャに移行できる。

「PK」も中学部対象の競技だが、1 チーム 5 人が交互にミニサッカーゴールに向けて蹴り合い、ゴールインの数で競う競技である。障害物として、ゴールライン上に、カラーコーンを設置しているが、当たってもゴールラインを通過していれば、得点となる。T スロー同様に、中学部で PK を経験した生徒は、高等部のサッカーにスムーズに移行できる。

また、キックベースボールは、生徒が競技に集中できるようにと、コート内に 3 人のコーチが入って指示することができる県内独自のルールを採用している。

なお、病弱児は他校の生徒との交流を通じた感染を予防するため、1 校単独でクロッケー大会を開催している。

図表 4-8 学部別の設置状況

大会名	競技名	対象学部	対象障害	参加人数
スポーツ大会	キックベースボール	中学部	全障害種	500人
	PK			
	Tスロー			
	ソフトボール	高等部		600人
	キックベースボール			
	ティーボール			
	サッカー			
	ボッチャ			600人
	バスケットボール			100人
	クロッケー			80人
駅伝大会	駅伝	中学部		600人
		高等部		1,000人

(2) 指導者講習会

〈陸上〉

千葉県知的障害者陸上競技協会の協力で、練習方法やフォームなどの勉強会を実施

〈フライングディスク〉

他県のフライングディスク協会関係者を招き、練習方法やルール説明、実技指導を実施

3. その他

(1) 障害者スポーツ大会推進委員

全国障害者スポーツ大会と千葉県特体連の主催大会では、実施種目が必ずしも一致していないため、学校卒業後の種目間の連携を目的に、全国障害者スポーツ大会の種目ごとに障害者スポーツ大会推進委員を任命して、特別支援学校卒業後のスポーツ環境の提供を模索している。

千葉県特体連の主催大会も、楽しみ志向から競技志向へと徐々に変わってきている。なかには、ソフトボールやサッカーのように、全国障害者スポーツ大会を考慮して、公式ルールに近づけて大会を開催している競技もある。

(2) 卒業後のスポーツ機会の提供

2010 年に千葉県で開催された全国障害者スポーツ大会(ゆめ半島千葉大会)に向けて結成されたチームが現在も活動している。当時、特別支援学校の生徒であった選手が社会人となり、そこに現役生徒が加入することで、バランスの取れた年齢層でのチームが構成されている。

バレーボール、フットベースボール、バスケットボール、卓球(聴覚)、サウンドテーブルテニス、グランドソフトボールは、県内の特別支援学校を拠点に活動している(図表 4-9)。フライングディスク、陸上、ソフトボール、サッカーは県の競技団体と連携している。

図表 4-9 県内施設を拠点に活動している競技一覧

活動場所	種目名	備考
県内の特別支援学校	バレーボール	月1～2回の練習
	フットベースボール	月1回の練習
	バスケットボール	月2～3回の練習
	卓球(聴覚)	聴覚障害の特別支援学校
	サウンドテーブルテニス	視覚障害の特別支援学校
	グランドソフトボール	
県内の障害者施設	ソフトボール	障害者ソフトボール協会がサポート
県内の障害者スポーツセンター	車椅子バスケットボール	

岐阜県特別支援学校体育連盟

【特徴】
競技力向上のために改革を行い、組織的な業務体制を整備
全校が参加しているフライングディスクの担当教員が中心となり理事会を運営
ブロック大会や全国大会に参加する選手やチームを支援費でサポート

1. プロフィール

(1) 設立経緯

岐阜県内の特別支援学校の生徒を対象に、体育及びスポーツを奨励し、明るくたくましい人づくりの推進を図ることを目的として、1989 年に設立された。大会、記録会、講習会の開催・助成、体育活動及びスポーツに関する広報活動などを行っている。

高等部設置の学校が増え、部活動が活発化してきたことに伴い、加盟校の体育教員の間で、競技力向上を目的とした特体連組織に移行したいとの声が多くなったため、2012 年度より本格的に組織改革についての検討を開始した。加盟校へのアンケート調査に加えて、年 5 回の理事会の開催、担当者間での打合せ、岐阜県高等学校体育連盟の組織体制を参考に、内規や運営体制などについて、各方面と積極的な意見交換を行った。その結果、2014 年度に個人に依存しがちであった業務を組織的に対応できるようにと大幅な組織改革を行った。

(2) 加盟校数

県内には、20 校の特別支援学校（分校含む）があるが、分校は本校と同一校とみなすため、19 校の加盟校数となっており、全ての特別支援学校が加盟している。加盟校の内訳は、知的障害が 14 校（単置校 5 校、併置校 9 校）、肢体不自由（単置校）が 2 校、視覚障害（単置校）1 校、聴覚障害（単置校）1 校、病弱（単置校）1 校となっている。

(3) 対象学部

中学部、高等部

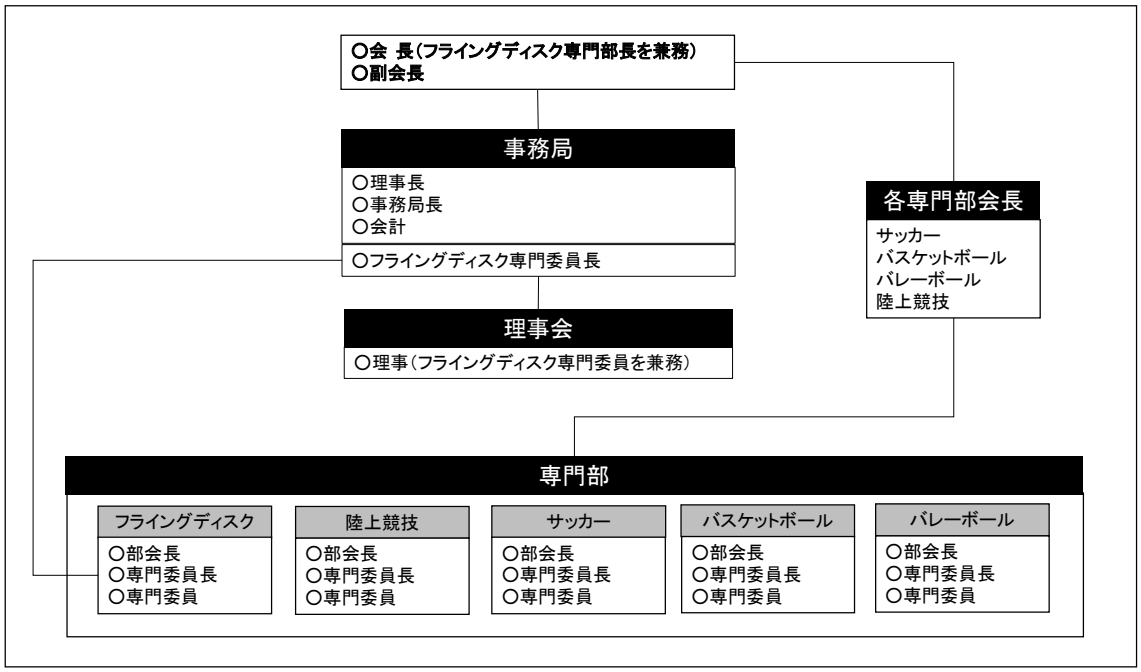
(4) 組織運営体制

会長 1 名、副会長 2 名、理事長 1 名、理事 19 名、監事 2 名、庶務若干名、専門委員長 5 名（各専門部 1 名）で構成されている（図表 4-10）。

連盟内に、競技専門部会（以下、専門部）を置いている。専門部のある競技（加盟校数）は、フライングディスク（19 校）、陸上競技（14 校）、サッカー（7 校）、バスケットボール（5 校）、バレーボール（2 校）である。フライングディスク以外の専門部には、全加盟校が参加しているわけではなく、障害種別に偏りが生じてしまうため、公平な意見集約を目的に、全加盟校が参加しているフライングディスクの専門委員が理事を兼務することで理事会を運営している。同様の理由で、フライングディスク専門部の専門委員長は事務局を兼務することになっている。

新たな種目の専門部を設けるためには、当該年度の事業報告・決算及び次年度の事業計画・予算を提出し、理事会で検討・承認を経て、当該年度の校長会に報告することになっている。

図表 4-10 岐阜県特別支援学校体育連盟組織図



(5) 事務局設置校

岐阜県立大垣特別支援学校(2014 年度現在。事務局は 2 年ごとの輪番制)

2. 主催事業の内容

(1) 大会

一般社団法人岐阜県障害者スポーツ協会の後援と公益財団法人十六地域振興財団の助成を受けて、前述の専門部がある 5 種目で大会を開催している。さらに、陸上大会には、中日新聞が後援、バレーボール大会には、岐阜県バレーボール協会障がい者委員会が協力している。サッカーは年 3 回、バスケットボール、バレーボールは年 2 回の大会を開催している(図表 4-11)。

図表 4-11　岐阜県特別支援学校体育連盟の主催大会一覧

大会名	競技名	対象学部	対象障害	参加人数	開催時期
岐阜カップ大会	バスケットボール	中学部 高等部	全障害種	約60人	8月・2月
サマーフェスティバル	サッカー			約300人	8月
知的障がいサッカー大会			知的障害		10月・11月
チャレンジ陸上競技大会	陸上競技		全障害種	約350人	7月
フライングディスク大会	フライングディスク			約50人	8月
バレーボール大会	バレーボール			約60人	7月・12月

3. その他

(1) 経費

各学校の児童生徒数に応じて各校が負担する「負担金」、岐阜県からの「補助金」、「寄付金」及び「それ以外の収入」がある。「支援費」は、東海ブロック大会以上に出場する選手やチームに対して、大会参加費等の生徒の活動に関わる経費を各専門部からの申請に対して、審議を経て補助する助成金であり、収入の一部が充てられる。

(2) ふれあいスポーツ大会

2011 年度までは、岐阜県特体連の主催事業として、親睦や交流を目的とした「ふれあいスポーツ大会」を開催していたが、2012 年度から県内を 5 地区（飛騨、東濃・可茂、美濃、西濃、岐阜）に分け、多くの人が参加できるリトミックとフライングディスクを、大会の会場となる特別支援学校の年間行事として開催している。

東京都特別支援学校・特別支援学級設置学校体育連盟

【特徴】
特殊学級の後援団体を母体に、連盟が発足・発展
団体競技のバスケットボールとサッカーにも特別支援学級から参加
競技ごとにレベル別の参加基準を設けて、加盟校の幅広い参加に配慮

1. プロフィール

(1) 設立経緯

豊島区の有志が集まり、特殊学級の後援団体「やまびこ会」が 1955 年に発足した。当初は、豊島区の特殊学級を中心とした体育行事が進められていたが、次第に東京都全域の特殊学級から生徒が参加するようになり、その流れのなかで、養護学校も参加するようになった。

1960 年の東京都特殊学級・養護学校球技大会から、やまびこ会・東京都特殊教育研究会事業部の共催となり、その後、東京都教育委員会も共催に加わり、大会名も東京都特殊学校・養護学校体育祭に変更された。1982 年、体育課より、東京都養護学校総合体育大会の委託にあたって、研究団体への体育大会運営の委託は適切ではないことから、体育連盟設置の打診があり、東京都特殊教育研究会事業部を発展的に独立する方向で体育連盟設置の検討に入った。

1985 年、「東京都養護学校・心障学級設置学校体育連盟」が発足し、1990 年からは東京都の委託事業として大会が開催されるようになった。2007 年の改正学校教育法により、従来の盲・聾・養護学校の名称が特別支援学校に統一されたのに伴い、「東京都特別支援学校・特別支援学級設置学校体育連盟」へと名称を変更した。

(2) 加盟校数

80 校のうち、特別支援学校（知的障害教育部門）36 校、特別支援学級（知的障害・情緒障害教育部門）44 校

(3) 対象学部

中学部、高等部、特別支援学級（中学校）

(4) 組織運営体制

会長 1 名、副会長 2 名、常務理事 4 名、理事 20 名、会計監査 2 名、事務局長1名で構成されている。専門部には、「キックベースボール部」「ソフトボール・ティーボール部」「陸上競技部」「バスケットボール部」「サッカー部」「研究部」があり、各専門部に、担当校長 1 名、部長 1 名、副部長 2 名が置かれる。担当校長には、特別支援学校の校長が就任し、部長が統括代表として一般業務の運営を行う。

(5) 事務局設置校

東京都立中野特別支援学校（2014 年度現在。事務局は 2 年ごとの輪番制）

2. 主催事業の内容

(1) 大会

該当競技の部活動・クラブ活動の有無や、指導教員の有無などによって、各加盟校で出場できる大会は異なっている。特別支援学校のみが参加している大会は、キックベースボール大会(24校)、ソフトボール・ティーボール大会(13校)である。特別支援学級も参加している大会は、陸上競技大会(67校)、バスケットボール大会(50校)、サッカー大会(19校)である(図表 4-12)。審判はソフトボール・ティーボール大会を除いて、原則、教員が務めている。

図表 4-12 東京都特別支援学校・特別支援学級設置学校体育連盟の主催大会一覧

大会名	合計	特別支援学校		特別支援学級	対象障害
		中学部	高等部		
キックベースボール大会	24校	4校	20校		知的障害
ソフトボール・ティーボール大会	13校	13校			
陸上競技大会	67校	6校	22校	39校	
バスケットボール大会	50校	1校	28校	21校	
サッカー大会	19校	18校		1校	

1) キックベースボール大会(中学部、高等部)【9 月中旬】

生徒の実態に合わせて、フットベースボール、キックベースボール、ワンベースボールのどれかに参加できる(図表 4-13)。フットベースボールは、ピッチャーがボールを転がしてバッターが蹴るのに対して、キックベースボールはピッチャーがおらず、ベース上にボールを置いてバッターが蹴るのをルールとしている。

チームが男女で構成する混合チームを基本としており、試合途中に選手交代などにより混合チームでなくなった時点で没収試合となる。原則、フットベースボールはトーナメント戦、キックベースボール、ワンベースボールはリーグ戦である。イニングは、フットベースボールが 5 回(40 分を越えて新しいイニングには入らない)、キックベースボール、ワンベースボールが 3 回となっている。

図表 4-13 キックベースボール大会の参加条件一覧

種目名	参加条件
フットベースボール	・野球・ソフトボールのルールをおおよそ理解している ・試合状況を見ながら自分で判断して動ける ・キック力があり、ボールを外野までノーバウンドで蹴ることができる
キックベースボール	・野球のイメージを持っているが、ルール・方法の理解ができていない ・キック力が弱く蹴ったボールが内野で止まってしまう ・移動時など直接的な支援が必要
ワンベースボール	・キックベースボールのレベルに達していない ・言葉掛けや直接的な支援で1塁まで走ることができる

2) ソフトボール・ティーボール大会（高等部）【9 月下旬】

ソフトボールは各校 1 チーム、ティーボールは各校最大 3 チームの参加が可能だが、生徒は両種目への出場はできない。参加条件は、ソフトボールでは、ルールをおおよそ理解し、個人、集団的技能を満たす者となっているが、ティーボールは、参加条件を求めていない。また、ソフトボールでは、特体連ルールとして、バッターが打ってからのみランナーの離塁を認めている。ソフトボール協会公認審判員及びティーボール協会審判員に協力を依頼している。

3) 陸上競技大会（中学部、高等部、特別支援学級）【10 月中旬】

①トラック競技

スタート姿勢は自由であるが、各校でスタートラインから出ないことやフライングについての指導が行われている。フライングは2回で原則失格としている。リレーでは、バトンの受け渡し後、他の競技者に影響を与えないためにレーン内に留まり、監察員の指示を待つことにしているため、バトンを渡した後に自分のレーンに残る練習を学校ごとに実施している。原則、一人 1 種目の参加としているが、リレーは、各校各学部男女 1 チームの出場が可能である。

②フィールド競技

走り幅跳びは、試技 3 回として、踏み切り板を設置するが、記録は最短距離の実測としているため、砂場内に足が掛からない限りは有効の記録となる。

③参加基準記録

100m 走（25 秒以内）、200m 走（60 秒以内）、400m 走（2 分以内）、800m 走（4 分 45 秒以内）、1500m 走（8 分以内）、走り幅跳び（1m 以上）、ソフトボール投げ（10m 以上）となっている。

4) サッカー大会（中学部、高等部、特別支援学級）【11 月下旬】

生徒の実態に合わせて、8 人制、5 人制、ドリブルシュートにエントリーできるため、多くの生徒が習熟度に応じた種目への参加が可能である。参加チームの上限は、8 人制（サッカー）では A マッチ 1 チーム、B マッチ 1 チーム、5 人制（フットサル）では、C マッチ 1 チーム、D マッチ 2 チーム、ドリブルシュートは 4 人以上の参加であれば、何チームでもエントリーすることが可能である（図表 4-14）。

図表 4-14 サッカー大会の参加条件一覧

種目名	備考
8人制（サッカー）Aマッチ	就業技術科のある学校は、Aマッチにエントリー 前年度のBマッチ入賞校は、Aマッチへのエントリー検討を促す フットサルコートの半分の距離をノーバウンドで蹴れる選手は原則、8人制にエントリー
8人制（サッカー）Bマッチ	
5人制（フットサル）Cマッチ	前年度のDマッチ入賞校は、Cマッチへのエントリー検討を促す
5人制（フットサル）Dマッチ	
ドリブルシュート Eマッチ	4人以上の参加があれば、何チームでもエントリー

5) バスケットボール大会（中学部、高等部、特別支援学級）【2 月上旬】

1 チーム 8 人以上でエントリー可能である。参加チームの上限は、バスケットボールでは、中学部、特別支援学級、高等部女子が 2 チーム、高等部男子が 4 チーム、ポートボールでは 3 チームである。また、フレンドリーバスケットボールは原則 1 チームだが、バスケットボールに男女合わせて 4 チーム以上エントリーしている学校は、2 チームがエントリーできる（図表 4-15）。

図表 4-15 バスケットボール大会の参加条件一覧

種目名	参加条件
バスケットボール	中学部（男女不問） 高等部（男女別） 支援学級（男女不問）
フレンドリーバスケットボール	高等部（男女不問） バスケットボールのイメージは持っているが、ルール・方法の理解ができていない生徒が対象。ランニングステップを踏んでドリブルシュートができる生徒が1人でも含まれていたらエントリーできない
ポートボール	中学部（男女不問） 高等部（男女不問） 支援学級（男女不問）

(2) 審判講習会

〈サッカー〉J リーグの公認審判員を務める教員が講習会を実施

〈ティーボール〉ティーボール協会に所属している教員が講習会を実施

3. その他

(1) 経費

収入は、東京都教育委員会からの「共催分担金」に加えて、東京都知的障害特別支援学校 PTA 連合会、東京都特別支援学級設置学校長協会、東京都知的障害特別支援学校長会などからの「助成金」及び「その他の収入」から成る。

(2) 研究部

知的障害のある児童生徒の体育的活動に関する研究を行っているため、東京都教育委員会研究推進団体の研究団体に登録している。

(3) 大会運営の課題

就業技術科※設置校の部活動は非常に盛んで、大会等に参加すると、他校との実力差が大きく、大差がつく試合が増えてしまう。さらに競技力向上を目的にしている場合、その差は開く一方で、同カテゴリー間での開催も限界にきており、今後の改善策について検討している。

※就業技術科は、東京都特別支援教育推進計画に基づき、軽度の知的障害の生徒を対象にした職業的自立と社会参加に向けた職業教育を実施する学科

東海地区盲学校体育連盟

【特徴】
偶数年と奇数年で開催する競技を入れかえて、多くの競技に触れる機会を提供
指導者や体育施設の状況により、各校の強化競技は多様

1. プロフィール

対象県は、静岡県、岐阜県、愛知県、三重県の 4 県であり、1960 年より第 1 回の野球大会を開催している。加盟校は、①岐阜盲学校（小中高）②静岡視覚特別支援学校（幼小中高）③沼津視覚特別支援学校（幼小中高）④浜松視覚特別支援学校（幼小中高）⑤名古屋盲学校（幼小中高）⑥岡崎盲学校（幼小中高）⑦三重県立盲学校（小中高）の 7 校で、ブロック内の全ての視覚障害の特別支援学校が加盟している。対象学部は、ほとんどの主催大会で中学部と高等部であるが、陸上競技大会は小学部も対象になっている。

事務局校は、現在、県立岐阜盲学校が務めており、2 年ごとの輪番制である。

2. 大会開催と参加状況

(1) 主催大会

偶数年と奇数年で開催する競技を入れかえており、2014 年度は陸上競技、フロアバレーボール、2015 年度はグランドソフトボール、ゴールボールを開催する（図表 4-16）。毎年開催している野球大会は、参加人数に応じて開催形態を変えている。2014 年度は参加 4 校の生徒を連合チームとして 2 チームに編成し、勝利チームが全国盲学校野球大会に出場するが、参加校が単独で出場できる年度は、優勝校がそのまま全国盲学校野球大会に出場する。また、柔道は参加者が少ないことを理由に 2013 年度大会を最後に終了した。

図表 4-16 東海地区盲学校体育連盟主催の大会一覧

<table>
<tr><th>種目名</th><th>対象学部</th><th>参加人数</th><th>開催時期</th><th>備考</th></tr>
<tr><td>陸上競技</td><td>小学部
中学部
高等部</td><td>約300人</td><td>2014年7月</td><td rowspan="4">隔年開催</td></tr>
<tr><td>フロアバレーボール</td><td>中学部
高等部</td><td>約100人</td><td>2014年11月</td></tr>
<tr><td>ゴールボール</td><td>中学部
高等部</td><td>約50人</td><td>2015年11月</td></tr>
<tr><td rowspan="2">グランドソフトボール
（野球）</td><td rowspan="2">中学部
高等部</td><td>約30人</td><td>2015年7月</td></tr>
<tr><td colspan="2">東海地区野球大会（全国盲学校野球大会の予選会）として実施</td><td>毎年開催</td></tr>
<tr><td>柔道</td><td>中学部
高等部</td><td colspan="3">参加者の減少により2013年度をもって終了</td></tr>
</table>

注）全国盲学校野球大会は視覚障害者の野球（グランドソフトボール）の全国大会

(2) 参加形態

生徒の参加形態は、学校によって多様であるが、3 タイプに分類することができる。

1. 競技別の部活動に所属している生徒が、そのまま競技別大会に向けて練習する
2. スポーツ部の生徒が、大会の開催時期に合わせて、競技別の練習をする
3. 大会に向けて、希望者を募って期間限定の練習会を開催する

(3) 強化競技

主催大会には、陸上競技、グランドソフトボール、フロアバレーボール、ゴールボール、野球があるが、各校ともに全競技への対応が難しいため、以下 4 点の選定理由により、各校で強化する競技を絞っている。

1. 部活動に所属する生徒が多く、自校だけで 2 チーム編成して練習できる環境がある
2. 生徒の意向を反映して大会に参加する競技を決める
3. 教員が指導可能な競技に特化する
4. 学校の体育施設の状況による(ゴールボールのゴールがある学校など)

3. その他

県をまたいだ移動を伴うブロック大会では、多くの生徒は社会勉強の一環として、バスや電車などの公共交通機関を利用する。一方で、開催会場の立地や各学校の指導方針から、スクールバスを利用する学校や、大会期間中、バスを貸し切る学校などもある。

大会期間中の会場への移動については、原則、教員の引率があるが、待ち合わせ場所への集合などで怪我をしたり、事故に巻き込まれたりした場合は、校外活動として保険の補償対応をするようにしている。

近畿地区聾学校体育連盟

【特徴】
陸上競技大会を学部行事にする学校もあり、生徒にスポーツ参加の機会を提供
中体連、高体連、高野連に加盟して、健常者の大会にも積極的に出場

1. プロフィール

対象府県は、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県の 6 府県であり、1958 年に発足した。加盟校は、①滋賀県立聾話学校（幼小中高）②京都府立聾学校（幼小中高）③大阪市立聴覚特別支援学校（幼小中高）④生野聴覚支援学校（幼小中）⑤堺聴覚支援学校（幼小中）⑥だいせん聴覚高等支援学校（高）⑦神戸聴覚特別支援学校（保※幼小中高）⑧姫路聴覚特別支援学校（保※幼小中高）⑨豊岡聴覚特別支援学校（幼小中）⑩奈良県立ろう学校（幼小中高）⑪和歌山ろう学校（幼小中高）の 11 校である。対象学部は、中学部と高等部である。

事務局校は、現在、京都府立聾学校が務めており、2 年ごとに合議制による互選で事務局校を決定する。2013 年度の登録人数は 487 人である。

※兵庫県の学校のみ、「保（保健相談部）」が存在している。

2. 大会開催と参加状況

(1) 主催大会

陸上競技、卓球、野球、バレーボールを開催している（図表 4-17）。野球は、中学部と高等部の合同チームでの参加が可能である。

図表 4-17 近畿地区聾学校体育連盟主催の大会一覧

種目名	対象学部	開催時期	備考
陸上競技	中学部 高等部	5月中旬	中学部と高等部は同日に開催
卓球	中学部 高等部	6月中旬	
野球	中学部 高等部	9月上旬	
バレーボール	中学部 高等部	10月上旬	

(2) 参加形態

競技別の部活動に所属している生徒が、そのまま競技別大会に向けて練習する学校がほとんどであるが、所属部員の少ない学校では、各大会の開催時期に合わせて他の部活動に所属する生徒を集めて参加する場合もある。陸上競技大会を学部行事として位置付けて、学部の全生徒が大会に参加している学校もある。

(3) 一般校の体育連盟への参加

陸上競技・卓球・バレーボールは、中学校体育連盟（以下、中体連）、高等学校体育連盟（以下、高体連）、軟式野球は高等学校野球連盟（以下、高野連）に登録して、それぞれの主催大会に参加している学校もある。そのため、陸上競技、卓球、軟式野球の大会に出場する生徒は、近畿地区聾体連主催大会と一般校の体育連盟主催大会の両大会に出場する機会がある。テニス部のある学校では、近畿地区聾体連主催大会にテニス競技がないので、中体連、高体連の主催大会に出場している。

3. その他

県をまたいだ移動を伴う地区の大会では、多くの生徒は社会勉強の一環として、バスや電車などの公共交通機関を利用する。一方で、開催会場の立地などにより、スクールバスを利用する学校もある。

会場移動を含む大会期間中の怪我や事故についての保険は、大会ごとではなく、学校活動全般をカバーする独立行政法人日本スポーツ振興センターによる災害共済給付制度を利用している。大会参加は、課外活動として捉えている。